

会員近況 描くこと 伝えること 篠 光定

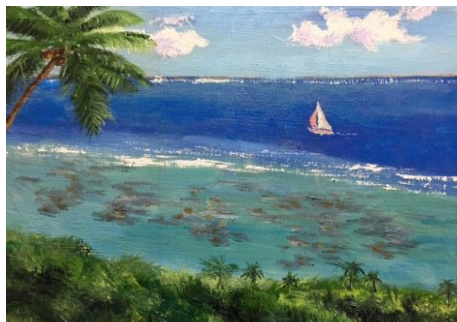
新日美に入会させていただいてから3年になる。インターネットでスケッチ会や会の活動を知ったのがきっかけである。スケッチ会、東京支部展、本展を経験する中で、様々な人の心、人生、物語に接することになった。

描く人、観る人、対象となる自然、人や事物。そして自分自身。対象を観ること、それを受け止めて、表現すること伝えることの大事さ難しさ。それらのすべてが、今は楽しみにもなっている。

自然、事物、人の生き方、経験が絵を通して、介して、表に現れてくると感じるからだ。

窮屈な縛りが無い、自由さがあるこの会の雰囲気、空気も感じてきた。会のメンバーや、参加された人たちの声としても聴いてきた。先輩たちが培ってきた伝統、繋がりがあるのだろうと思っている。出会った人たちからは色々教えたいと思っている。描くことを楽しみなさい。描くことは祈り。自分のイメージを大事に。

あるヴァイオリニストからは、技術などをしっかりと学ぶ必要がありますが、最終的には自分がさらけ出されてしまうものなので、覚悟を決めて真摯に自分磨きを怠らざるに、より良いものを人とシェア出来るようになるとの言葉をお坊様には、キャン



ので、覚悟を決めて真摯に自分磨きを怠らざるに、より良いものを人とシェア出来るようになるとの言葉をお坊様には、キャン

バスに向かって描くこと、続けることが禅に通じると仰っていた。自分と異質、違う世界に触れるぶつかることで、刺激を受け教えられる。真剣に生きてきた、生きようとしている、描いてきた人たちから元気をいただいている。

自然と向き合う、自分と向き合う、そして自分の作品を創る。拡散と集中。このことが絵を描くことだと思っている。

今、自分はこの会の異質なものがぶつかり合い共存する場で、自分と向き合い、自分の内から出てくるものを表現する、自分をさらけ出す作品を創りたい。会員相互だけでなく展覧会場への来場者等を含め関係者との対話もしたい。

発表の場、チャレンジの場として、一般の応募者も参加しやすいたくなくなる情報発信が必要なのだろう。新日美の特徴やその方向性について、新しい企画等の発信もより必要であると思う。(東京支部会報から引用)

アートサロン大賞展に出品して

水野美預子

三年前に一作品だけ出品し佳作賞をいただいたので、今回はどうだろうという気持ちで二十号を二点出してみました。

布と果物」というのが私のテーマの一つです。一つはブロッコチエックとピワとカゴ、他方は葡萄とレースの布に決めました。このテーマで描く人は余りいないためいかに有利だと思っています。よくどちらかに重点を置いたらと言われるのですが、私は両方しっかりと描いてバランスを取りたいと考えています。今のところ変える気になれません。

結果はブロッコチエックの方がまた佳作賞、レースの布は入選でした。私はレースの方が断然良い仕上がりだと思っていました。結果を見て正直がっかりしました。



レースの布にはかなり明暗度の違う影を入れていたのですが、良い評価を受けませんでした。これは新日美でもあまり評判はよくないようです。上野の森美術館の公募展にも出品しているのですが、こちらはまあまあの評価を受け

ています。十号という小さい作品のせいかと思います。アメリカから帰国して水彩画展に出品して四年連続して落選しました。

ある方から受け入れてくれる所に出品しなきゃダメだよと言われ日本はチャンスが平等じゃないんだと気付きました。その点、新日美は油絵でなくとも受け入れる大らかな公募団体だと思っています。新しい人にも公平だとも...

ただ小さな作品は大きな作品に負けます。私は水張りしないので四十号の紙二枚をあれこれ工夫してトリップティック(二部作)にして出品していました。大きな作品は半分の大きさを描いてみて、倍にして仕上げます。それに時間を取られ個展を新作だけで開催出来ず悩みました。やつと表具屋が見つかり八十号の紙で今年から出品できそうです。今、どの果物と布にするか迷っているところです。

自由随筆

歌舞伎 あらしの雨 「あらし」 住佐美紗子

あらしの雨には、きむらゆういちの原作で昨年度南座において舞台化された新作歌舞伎で上演された。原作にはれ込んだ人気役者

中村獅童は強く舞台化を望み、自ら主役の狼がぶを演じる。相手役の山羊のめいはこれ又人気若手役者、尾上松也がかわいく美しく務める。

私は原作を知らず、人気動物画家のあべ弘士の絵本で知り思わず大ファンになった。あべ弘士は北海道旭川の旭山動物園で飼育員として働きながら動物や風景を描いていた。ワールドでやさしさのじみ出る画風は海外でもファンが多い。

狼の がぶ と山羊の めい はあらしのよるに一軒の小屋で暗闇の中互いの姿がわからぬまま楽しく語り合い、再会を約束する。嵐の去った翌日再会し互いの姿を知り驚く。狼は山羊を食べるのが本来の姿で山羊は仲間に食われないよう岩山の上を身軽に逃げ回る。

狼の がぶ がかわいい山羊の めい のお尻を見て 食いてえなあ、いやいやダメだ」と一人ごとを言うシーンでは劇場内は笑いに包まれる。動物の物語で分かりやすい内容なので子供もちらほら来ていた。

食うものと食われるものが入り乱れ戦う。獅童は歌舞伎の舞台化を強く望んだというだけあって見事に舞う。松也の山羊 めいは本当にかわいく軽やかに楽し気に踊る。獅童はかつてスキヤンダルなどで話題を提供したが、今は見事に変身?Eテレで歌舞伎の解説をするなど活躍し、伝統に新しい風を吹き込んでいます。

舞台の上演は、又いつ見られるかわからないが、あべ弘士の絵本はシリーズで出版され親しみやすい画風なので是非一読されたいと思う。

絵本のみならず、あべ弘士の描く動物画や風景は、動物の姿を通して人間の優しい面や厳しさも感じられぐつと胸に来る。夕日を眺めるライオンなど人間の姿と思わずダブってしまう。

この様な大人の絵本はいかがでしょうか。